

I 学校教育目標

豊かな心と自ら学ぶ意欲をもち、主体的に活動する生徒の育成 ～21世紀を生き抜く力の育成～ <校訓>創造・誠実・明
目指す学校像 「一人ひとりが、生き生きと輝いている学校」(元気いっぱい 挨拶いっぱい)の鹿ノ台中学校)

II 前年度に残された課題

- ICTを活用した授業づくり(「主体的・対話的で深い学び」の推進)
- 自治力と規範意識を培う(生徒の自尊感情の醸成)
- 学校運営協議会の運営(保護者や地域との連携)
- 教職員の働き方改革の推進(いきいきと子どもと向き合うために)

III 本年度の重点課題

- ①「主体的・対話的で深い学び」の推進(自分の居場所がある学び)
- ②ICTを活用した授業づくり(主体的な学びの実現に向けた授業研究の推進)
- ③生徒の自尊感情の醸成
- ④環境教育の推進(スーパーエコスクール)

IV 来年度に残された課題

- 自治力と規範意識を培う
- 組織的・日常的な委員会活動の推進・生徒が自主的に行い達成感を味わえる学校行事の推進・生徒から信頼される生徒指導の構築
- 生徒が楽しく授業づくり
- 「主体的・対話的で深い学び」の推進・ICTを活用した授業づくり
- 保護者・地域から信頼される学校づくり
- 学校運営協議会の運営・保護者や地域との連携・学校評価の活用
- 教職員の働き方改革の推進(いきいきと子どもと向き合うために)
- ICTを活用した業務の効率化・定時退勤日の設定・部活動の休養日の設定

評価項目	具体的達成目標と評価指標	外部アンケートの分析		自己評価		学校関係者評価	
		児童生徒アンケート	保護者アンケート	評定	最終評価(成果と課題)		課題の改善策等
①	<ul style="list-style-type: none"> 教科ごとに定めた指導の重点に即した授業を日頃から意識して展開するとともに、教員各自が「主体的・対話的で深い学び」についての理解と認識を深め、研究授業・授業公開を行い、授業力の更なる向上を図る。 学習活動の中で、ペア学習、班別活動、意見交流の場を多くとる。 自分の意見を発表したり、学級から学年へと意見を出し合う場を広げる。 新観点での評価についての研修を進め、指導と評価の一体化を図る。 	<p>「鹿ノ台中学校の授業はわかりやすく楽しく学習できる。」は、75.1% 「話し合い活動や意見を発表する授業、場面がある。」は、76.9% 「発表活動に積極的に取り組めた」は、73.8%が肯定的な評価であった。</p>	<p>「生徒は、授業がわかりやすいと言っている。」は、60.9%であった。昨年度72.0%、2年前は68.5%、3年前は55.3%。授業参観やオープンスクール等で、実際の授業を参観していただく機会を持つ必要がある。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> 学校休業によるオンライン授業の実施等、授業数の確保が課題となり、学習内容を広げたり深めたりする時間がとりにくかった。 生徒の活動を大切に授業が展開されていると思われるが、いっそうわかりやすく深い学びとなるように授業力を高めたい。 保護者アンケート「学校は、学習の達成度をわかりやすく示している。」では、肯定的な回答は、70.2%であった。新学習指導要領による初めての評価だけに、いっそう丁寧な説明が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、知識のみならず活用力を高める手だてを講じる。 授業ごとに、めあてとまとめを明確に提示することで生徒に目標を持たせるとともに、自らの学びを自己評価できるようにする。 課題に対して、生徒が自ら考え、自分から取り組む授業を創造し、展開の工夫などの改善を行なう。 引き続き「主体的・対話的で深い学び」の研修を深め、授業研究を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年が上がるにつれて自分の意見を力や主体性が伸びてきている。グループ探求、主体的に動く教育をさらにこそ学びたいという思いになるので、これからも「主体的・対話的で深い学び」の推進をお願いしたい。 3観点による評価が変わったことの戸惑いもあると思う。何を頑張ればいいのか、ねらいや目標を生徒がしっかりと知ることが必要である。
②	<ul style="list-style-type: none"> 授業におけるchromebookの使用内容(ロイノート)89.8%、写真を撮る71.5%、発表動画作成59.1%、ネット検索(64.5%) ロイノートを使った授業について(楽しい)40.8%、わかりやすい33.3%、使うのが難しい22.1%、うまく使えないので楽しくない4.2%) eライブラリを使った学習について(楽しい)20.6%、わかりやすい43.3%、使うのが難しい25.8%、うまく使えないので楽しくない7.2%) ICT教育の推進のため、職員研修の実施や研修会に参加する。 	<p>「授業におけるchromebookの使用内容(ロイノート)89.8%、写真を撮る71.5%、発表動画作成59.1%、ネット検索(64.5%)」</p>	<p>「ロイノートを使った授業について(楽しい)40.8%、わかりやすい33.3%、使うのが難しい22.1%、うまく使えないので楽しくない4.2%)」</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍の中、双方型のオンライン授業や課題のやり取り等を実施した。昨年度に比べ教員のICT活用は一気に進んだ。 授業公開の実施については、それぞれの教員も授業中なので、参加教員数が少ない課題がある。市教科等研究会等も中止になる中、教職員大学の実習生への研究授業等へのかかわりができたことでは、教員にとって大きな成果であった。 学校休業中に、「ICTを活用した授業づくり」の研修、ITC支援員による「情報リテラシー」研修を行い、教員全体でICTへの理解と認識を深めた。教育研究所のWeb研修や市内教科等研究会での情報交換も密にすることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 1人1台のタブレット端末が整備された中、授業の中で効果的にICT機器を活用する。引き続き、教科ごとに定めた指導の重点に即した「主体的・対話的で深い学び」及びICT教育を推進する。 各教科、個人においてICTの研修、活用をさらに推進していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育環境もずいぶん変わる中で、デジタル教科書に代わり従来の紙の教科書をもたない時代が来るかもしれない。教員の研修の発展、時間の確保が必要である。 コロナ禍の緊急事態の中、オンラインでの授業が家庭で受けられる状況は特に受験生にとってありがたい。親の立場から見ていると、子供もタブレットを使うことについていふ慣れができていて、ICT活用のスキルが上がってきたように感じている。 オンライン授業も必要な場面はあるが、集団生活から社会へつなげる力を高めていくために、学校での人と人とのかかわりやコミュニケーションの経験を大切に、善悪の判断がきちんとできる生徒を育てていくことに結び付けていくことが大切である。 オンライン授業が遅れているという声も聞く。様々な場面での活用をお願いする。
③	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が周囲から評価され、認められる活動の場を増やす。 学校行事や委員会活動において、生徒の意見や考えを取り入れた内容を考案する。文化祭等で、有志発表への参加も積極的に進める。 生徒の自己有用感を高揚させる具体的な指標として、生徒アンケートの「自分には良いところがある」という設問に対する否定的な回答を、10%以下に低下させる。 	<p>「自分には良いところがある、または、自信を持っていることがある。」は、全体で62.7%で、昨年の57.8%を上回った。3年生については、64.5%で、1年前の2年生時の44.7%と比べずいぶん高くなっていて、同様に、2年生については、60.8%で、1年生時の51.3%と比べ高くなっていて、学年が上がるにつれて高くなってきているので、取組の成果は出ていると考えられる。</p>	<p>「生徒は、楽しく、安心して学校生活を送っている。」は、83.5%。「生徒は、学校行事に熱心に取り組んでいる。」は、87.5%と、コロナ禍の中で行事等、中止になったものも多くあったが、高く評価してもらっている。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動や委員会活動、学校行事、部活動等、あらゆる場面で各自の活躍できる場を設定するなど、自己有用感の高揚を意識した取組を進めている。その際、安心して自己表現ができる雰囲気作りにも配慮した。 体育大会での応援合戦や文化祭での有志発表は、大いに盛り上がった。有志発表は、例年を上回る多くの参加希望があった。 「みんなてががんばることを通じて達成感があった。」90.2%と、他者とのかかわりを通した学校行事等を通して、満足感を感じた生徒が多い。学年が上がるにつれて、他者とのかかわりを通して成長している様子が見えてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 平日頃から、教員間の情報交換を密にし、個々の生徒の課題を共有する必要がある。否定的な回答をした生徒に対しては教育相談等を通じて支援をしていく必要がある。いじめアンケート、教育相談等を通して、生徒の実態把握に努める。 生徒が主体となる学習活動や委員会活動、学校行事、部活動になるように、他校の実践等も参考にしながら、より良いものにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートの結果から、保護者も学校を信頼して子どもを送り出していることがうかがえる。 生徒は、挨拶もよくしてくれているし、落ち着いた学校生活を送っている様子である。その反面、奥にひそむものがないかも心配。この地域の子どもたちは、習いものが多く、ゆとりが少ないようにも感じる。小学校の時期は、手をかける、中学校の時期は目をかけることが必要。地域でも子供の居場所づくりを進めていきたい。 1台のタブレット端末を持つなか、SNS等を使ったいじめ等も心配。規範意識を高める取組がいっそう求められる。自己表現力、プレゼンテーション能力を高め、自己有用感をもつための経験が必要。
④	<ul style="list-style-type: none"> スーパーエコスクール活動の継続。 各委員会での計画的なエコ活動の推進 整美委員による緑化運動の推進。 生徒アンケートで「すすんでエコ的な活動ができた」割合80%にする。 	<p>「エコ的な活動ができた」に対して、74.3%が肯定的な回答であった。昨年度が68.2%であったので、エコの意識も高まってきている。また、「学校をきれいにするために、積極的に掃除ができた」に対して、86.7%が肯定的な回答であった。(昨年度83.1%)</p>	<p>「エコ学習の成果が家庭においてあらわれている」が40.0%で、「あまり思わない」が大半であった。生徒会新聞や校内放送で発表しうえて取組を進めた。生徒会新聞や校内放送で発表することで、生徒全体で共通理解することができ、取組が広がっているように思われる。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍の中、継続的に啓発や活動ができなかったことが悔やまれる。その中でも、各専門委員会において、今年度の「エコへの取り組み」を検討し、生徒総会で発表したうえで取組を進めた。生徒会新聞や校内放送で発表することで、生徒全体で共通理解することができ、取組が広がっているように思われる。 今年度は、1学年での校外学習テーマを「環境学習」と位置づけ、京エコリサーチで様々なエコの取組を学び、2学年では巡回型農業をグループワークを通して学ぶ予定であったが、コロナの影響で中止となった。学んだことを全校生徒へ発信できず残念であった。 継続した整美委員による緑化運動が進められているおかげで、季節ごとの花々が生徒の心に安らぎを与えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 本校がスーパーエコスクールとして認定されていることを誇りに、今後も意識を高めていきたい。 エコ意識やエコ活動が浸透しているなか、定着した委員会ごとの活動を風化させることなく、さらに継続・発展させていくとともに、SDGs(持続可能な開発目標)についての学び、取組を推進する。 地域ボランティアの方々や整美委員との協働による緑化運動を進め、季節ごとの花々が生徒の心に安らぎを与えられるように努める。 	<ul style="list-style-type: none"> SDGsの取組は、「誰ひとり取り残さない」という心も大切。自尊感情が高まりにくい生徒についてもSDGsの取組を通してケアしていただきたい。 自校の良さを語る生徒を育てるためには、教員自身も誇れるところを語る教員であることが大切。